

新頌

北原白秋

青空文庫

海道東征

海道東征

第一章 高千穂

男声（独唱竝に合唱）

神坐^ましき、蒼空^{あそぞら}と共に高く、み身坐^ましき、皇祖^{すめらみおや}。邈^{はる}かなり我が中空^{なかぞら}、窮^{きは}み無し皇産靈^{すめむすび}、いざ仰^{あめ}げ世のことごと、天^{あめ}なるや崇^{たか}きみ生^{あれ}を。国^な成^なりき、綿津見^{わたつみ}の潮^{しほ}と稚^{わか}く、

凝り成しき、この国土。

邈かなり我が国生、

おぎろなし天の瓊鉾、

いざ聴けよそのこをろに、

大八洲騰るとよみを。

皇統や、天照らす神の御裔、

代々坐しき、日向すでに。

邈かなり我が高千穂、

かぎりなし千重の波折、

いざ祝げよ日の直射す

海山のい照る宮居を。

神坐しき、千五百秋瑞穂の国、

皇国ぞ豊葦原。

邈はるかなり我が肇はつくに国、
 窮きはみ無し天あまつみ業わざ、
 いざ征たたせ早や東へ、
 光宅みちたらせ王みうつくしび沢をを。

第二章 大和思慕

女声（独唱竝に合唱）

大和やまとは国のまほろば、
 たたなづく青垣あそがきやま山。

東ひむがしや国の中央もなか、
 とりよろふ青垣あそがきやま山。

美しと誰ぞ隠る、
誰ぞ天降るその磐船。

愛しよ塩土の老翁、
きこえさせその大和を。

大和はも聴美し、
その雲居思遥けし。

美しの大和や、
美しの大和や。

第三章 御船出

男声女声（独唱竝に合唱）

その一

日はのぼる、旗雲の豊の茜に、
 いざ御船出でませや、うまし美々津を。

海風ぎぬ、陽炎の東に立つと、
 いざ行かせ、照り美しその海道。

海風ぎぬ、朝ぼらけ潮もかなひぬ、
 艫舳接ぎ、大御船、御船出今ぞ。

その二

あな清明け、神倭磐余彦、その命や、

あな映ゆし、もろもろの皇子たちや、その皇兄や。

行でませや、おほらかに大御軍、
まだ蒙し、遥けきは鴻荒に属へり。

慶を皇祖かく積みましき、
正しきを年のむた養ひましぬ。

神柄や、幾万、年経りましき、
暉や、かつ重ね、代々坐しましぬ。

和み霊、また和せ、ただに安らと、
荒み霊、まつろはぬいざごとむけむ。

大御稜威い照らすと御船出成りぬ、

日の皇子や、御銚とり、かく起ちましぬ。

その三

日はのぼる、旗雲の照りの茜を、
いざ御船、出でませや、明き日向を。

海風ぎぬ、満潮のゆたのたゆたに、
いざ行かせ、照り美しその海道。

海風ぎぬ、朝ぼらけ潮もかなひぬ、
艫舳接ぎ、大御船、御船出今ぞ。

第四章 御船謡

男声（独唱竝に合唱）

その一

御船出ぞ、おほみふなで 大御船出、
みともふねこぞ 御伴船こぞ 挙りさもらへ、
みとも 御伴びとこぞ 挙り揚げや。
ゆ 揺りとよめしなど 科戸の風と
 声放て、東に向きて。
おほみふねまかぢし 大御船 真梶みゆみ 繁ぬき、
ゆはず 照りわたる御弓の弦、
さや あな清明け、神にします、
まば あな眩ゆ、皇子みこ にします。
おほうなばら はろぼろや 大海原、
あをみなわ 涯はて なしや 青水沫、

揺りとよめ大^くき^に国^た民^み、
 おほきみ
 大君に、

この神に、
 たたごと
 讃へ言、
 よごと
 寿詞申せや。

その二

荒海の、
 荒海の潮の八^や百^ほ道^ちの、
 やしほち
 八潮道の、
 やほあひ
 潮の八^や百^ほ会^ひに、ハレヤ、
 ま
 とどろ坐^ます速^{はや}開^あ津^き姫^{つひめ}に、
 あさびらき
 朝開、朝のみ霧の
 とほしろ
 遠白に、

末鎮すゑぢんみ

鎮しんまらせ、

み眼まなこすがすがと笑あはませとぞ、

きこしめせと申まをさく

み船ふなうた謡。

その三

い

ヤアハレ

海原うなばらや青海原。

ヤアハレ

青雲あをぐもやそのそぎたち立、

その極^{きは}み、こをば。

我が海と大^{おほきみ}君宣^のらす、
我が空^{そら}と皇^{すめみま}孫領^しらす。

ろ

ヤアハレ

潮^{しほなわ}漚^わのとどまるかぎり、
舟^{ふね}の舳^への行き行くきはみ。

ヤアハレ

島^{しま}かけて、八十^{やそし}嶋^まかけて、
大^{おほ}海^{うみ}に舟^{ふね}満^みちつづけて。

見はるかしおほきみの大君宣らす、
四方よもつ海皇すめみまし孫領らす。

は

ヤアハレ
国くに土つちや、
大おほく国くに土つち。

ヤアハレ
国かべの壁かべそのそたちぎ立、
その極み、
こをば。

我が国とおほきみの大君宣らす、
我が土と皇すめみまし孫領らす。

に

ヤアハレ

あをぐも

青雲のそぎ立つきはみ、

しらくも

白雲の向伏すかぎり。

ヤアハレ

たにぐく

谷蟻のさわたるきはみ、

馬の爪とどまるかぎり。

見はるかす、おほきみの大君宣らす、よも四方つ国皇孫領らす。

ほ

ヤ
狭の国は広くと、

ヤ
嶮し国平らけくや。

ヤ

遠き国は綱うち掛け、

もそろよと、

もそろと、

国引くと、引き寄すと。

あなおほら、おほきみの大君宣らす、

あなをかし目翳しおはす。まかげ

善しや、善しや、いやさかの弥栄。

とどろとどろ、いやさかの弥栄。

第五章 速吸と菟狭

その一

男声独唱

海原うなばらや青海原、
 海道うみづちみちの導びきや、早さや槁根津日子ねつひこ、
 速吸はやすひの水門みとになも、その珍彦うづひこ。

童声或は女声合唱（童ぶり）

亀の甲かめに揺られて、
 潮しほの瀬せに揺られて、

かぶりかうぶり海の子、
棹さやらな、附ついまるれ、
波かぶりかぶるに、
み船へと移らせ、
名をのれ早や早や、
み船へまる出づるは
臣やっこぞとそれまをす。
国つ神と這はひこごむ。
潮みづく国つ神、
海豚いるかの眼まみ見よな、
遠眼とほめ、鋭眼とめ、慧さかしな、
羽はぶり羽はぶりおもしろ。

その二

男声女声（交互に唱和竝に合唱）

菟狭うさはよ、さす潮しほの水みな上かみ、

豊国とよくにの行宮かりみや。

ああはれ足あし一騰ひとつ宮あがりとよ、
行宮かりみや。

足あし一騰ひとつ宮あがりは、行宮かりみやと

青の岩根いほに一柱ひとしら坐ます。

足あし一騰ひとつ宮あがりに参出まゐると、

大わたの亀かめや、川かみのぼり来くる。

足あし一騰ひとつ宮あがりの大御饗おほみあへ、

誰たが献たまる、はるか雲居うみに。

あしひとつあがりのみや
 足 一 騰 宮 は菟狭津彦、
 あした
 朝さもらふ、夕さもらふ。

あしひとつあがりのみや
 足 一 騰 宮 は湍の上や、
 あが
 足一つ騰り、雲の辺に坐す。

ええしや、をしや、

ええしや、をしや。

第六章 海道回顧

その一

男声女声（交互に唱和竝に合唱）

かかなべて、日を夜を、海原渡り、
 かがなべて、将た歳を、宮遷らしき。

ああはれ、その幾歳、

ああはれ、その行き行き。

年ごとに、御伴船、いや数殖えぬ、

つぎつぎに、御従びと、またいや増しぬ。

ああはれ、また春秋、

ああはれ、そが海山。

その二

月の端や、足一騰宮、

一年や、筑紫の崗田の宮。

多^た祁^{けり}理^りとも、阿^あ岐^きの埃^えの宮^{みや}、
たづたづや、七^{なな}年^{とせ}や。あはれ。

吉^き備^びにして、また八^や年^{とせ}、高^{たか}嶋^{じま}の宮^{みや}、
大^{おほ}和^わはも遠^{とほ}しとよ、高^{たか}千^ち穂^ほよ遥^{とほ}けしと。

その三

か^かが^がな^なべ^べて、日^ひを^を夜^{よる}を、海^{うな}原^{ばら}渡^わり、
か^かが^がな^なべ^べて、将^はた^た歳^{とし}を、宮^{みや}遷^{うつ}らしき。

あ^ああ^あは^はれ、そ^その^の幾^{いく}歳^{とせ}、

あ^ああ^あは^はれ、そ^その^の行^いき^き行^いき。

満^みち^ち満^みつ^つや、み^み蓄^{たくはへ}、早^{はや}や^やか^かく^く成^なり^りぬ、
天^{あめ}の^の下^{した}こ^こと^とむ^むけ^けむ、秋^{あき}今^{いま}成^なり^りぬ。

ああはれ、えしや、
 ああはれ、今ぞ秋ときや。

第七章 白肩の津上陸

その一

男声（独唱竝に合唱）

青あをぐも雲しらかたの白肩つの津つ、その津に、

雄をたけびぞ今あがる、御船みふね泊はてぬ。

いざのぼれ大御軍おほみいくさ、

いざ奮ますらをへ丈夫ともの伴。

浪速なみはやの辺へに騒あぢがもぐ味あぢがも臈あぢがもや、その渚すを、

追ひ押しに押したてなのぼり、み楯たてな並めぬ。

いぎのぼれおほみいくさ大御軍、

いぎ奮ますらをへ丈夫ともの伴。

その二

くさかえ
日下江たてつの蓼津、その津に、

雄たけびぞ今あがる、おほみいくさ大御軍。

いぎのぼれ、大和は近し、

いぎ奮ますらをへ丈夫ともの伴。

なみはや
浪速うしほの潮さかのほなし遡ると、

我が行かば何はばむ、ながすねひこ長髓彦。

いぎのぼれ、大和は近し、

いぎ奮ますらをへ丈夫ともの伴。

第八章 天業恢弘

男声女声（独唱齐唱竝に合唱）

神坐^ましき、蒼雲^{あをぐも}の上^{うへ}に高く、

高千穂^{くじふるたけ}や 触峯^{たけ}。

邈^{はる}かなりその肇^{はつくに}国、

窮^{きは}みなし天^{あま}つみ業^{わざ}、

いざ仰^{おほみこと}げ大御言^{おほみこと}を、

畏^{かしこ}きや清^{さや}の御鏡^{みかがみ}。

国^{くに}ありき、綿津見^{しほ}の潮^{しほ}と稚^{わか}く、

光宅^{みちた}らし、四方^{よも}の中央^{もなか}。

邈^{はる}かなりその国^{くに}生^{うみ}、

かぎりなし天つ日嗣、
ひつぎ

いざ継がせ言依さすもの、
ことよ
まがたま
勾玉とにほひ綴らせ。
つづ

道ありき、古もかくぞ響きて、
みち
いにしへ

つらぬくや、この天地。
あめつち

邈かなりその神性、
はる
かむさが

おぎろなしみ剣よ太刀、
つるぎ
たち

いざ討たせまつろはぬもの、

ひたに討ち、しかも和せや。
う
やは

雲蒼し、神さぶと弥とこしへ、
かみ
いや

照り美し我が山河。
くは
やまかは

邈かなりその国柄、
はる
くにがら

動きなし底つ磐根、
ゆる
いはね

いざ起たせ 天皇、
 かむやまといはれひこのみこと
 神倭磐余彦命。

神と坐す 大稜威高領らせば、

あめのしたひと
 八紘 一つ宇とぞ。

はる
 邈かなりその肇国、

はて
 涯も無し天つみ業、

いざ領らせ大和ここに、

雄たけびぞ、 弥栄を我等。

建速須佐之男命

建速須佐之男命

枯山の巻

第一段

をを、をを、

をを。

神ぞ居^をれ、喚^{おら}び哭^くく

冥^{くら}き神、

神^{かむさ}性^がや、霹^{はた}靨^たと

猛^{たけ}猛^{だけ}し、ひと柱、

しや、須佐之男命、

建速須佐之男、

速須佐之男、

ひたぶるや、益良神と

暴ぶる荒御魂の大童

雄叫び、

泣きいさち、

踏み、

蹴急はららかすや、

纏き、放つ湯津爪櫛、

美豆良振り乱り、

拳たたき、

搔い垂らす、胸前や

振り分つ八握髭、

鳴りとよむ御統の御珠、頸珠、

たまきひぢまき
手纏、釧や、

ゆらかす足玉の緒もゆらに

揺り立て、

揺り荒べば、

凄まじ、この生み終の神、

さながらや、海阪の昂騰

押し移る

かんだちくも
神立雲、

はやて
早手風、飛ぶ電光、

とどろ立つ蒼の虬、

かきつめ
閃めく搔爪の焦ちを、巻き崩れて

うろくづ
覆す鱗魚の大降り雨、

かく嘆けば、

な
かく哭き喚べば、

くた
泣き腐し、泣き噪れば、

うち冥くらむ世のことごと、
降り腐くたすそのことごと、

海河も泣き涸くらすと、

しとど垂なる長霖ながつゆ雨や、ああ、

光無し、時無し雨、

日も無し、

夜よはも無し、

ただ恋こほし、妣ははの国、

ただ遠とほし、根ねの堅洲かたすくに国、

鬱おほにただ、鬱おほに泣き隠こもりぬ。

第二段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、喚び哭く

冥き神、

おどろしき神性の、

ひたぶるの人性の、

しるや、縦しや、善き悪しき、

ただ歎く暴風雨の神、

霧立つや八雲立つ

出雲の子ら、

大族、国造の祖先神、

しや、建速須佐之男命、

この命ぞ、

秀に見る空のさきざき、

眼に見る国のまほろば、

たたなづく青垣山は

青山の石根、木の立、

神弱り、泣き腐すと、

神さぶと、枯山と泣き枯らすと、

息長の息嘯の風と

雨呼ばひ、哭き喚び、泣き隠れば、

日を竝べて、夜を竝べて、かく歎けば、

鬱にただ鬱に冥む。

かくなれば、世の神神、

をを、神神、

清明けき、ひとしほに和御魂、

頭らけく、美しくしき、

常そよぎ、奇ふる神、

山と野の精霊、

大山津見、

鹿屋野比売二柱の神、

そが持ち分けて生みませる神、

もろもろの生きの産巢、
むすび

大地の草分、木の神久久野智神、
おほつち くさわき くくのちのかみ

末ずゑの岐れの神、
わか

澄みわたる神境や、
ひもろぎ

斎槻、湯津真椿、
ゆづき ゆづまつばき

葉広熊白樹、
はびろくまがし

巖櫃や、白檮や、処女櫃、
いつかし しらかし をとめまゆみ

ああ、黒檜、雲懸るさるをがせ、
くろび かが

雪の上の白樺や、
へ

水上の石楠の神、
みなかみ

柊や、ひらきそよご、
ひひらぎ

繁み立つ馬酔木、黒木、
しみ あしび

磐村の犬大羊齒、
いはむら

沼辺には茅萱、葦、髪がやつり。
ちがや

もろもろの鏡葉や、

霞かすみ針はり、織ほそき葉の神、

落葉木や、

若わか萌もえの光る木の芽、

花はな隠こもる杪へご。

そを何ぞ、泣き枯らすもの、

日に奪ひ、夜に奪ひ、雨ふらせば、

ありとある立たちのことごと、

ありとある色のことごと、

勢きほひ無なし、臥こやり撓たわむと、

すべしなし、立ちも滅ぶと、

水みの気け尽つき、素もとち力ちから尽つき、

ああはや、匂失せぬ。

第三段

をを、をを、

をを。

神ぞ居れ、喚び哭く、

冥き神、

しや、童、速須佐之男、

大天や高天原、

日は治らせ、大日靈貴、

さもこそや夜之食国、

夜は治らせ、月よ月読、

海原、吾はえ治らさじ、

言依させ、吾は聴かじ、

神柄ぞ、暴ぶる神、

胆太の眦裂くと、

言拳ぐと、泣きいさち、

抗ふと、おぞえ吼え立つ。

かく、吼え立てば、

大海よ、あをうなほら 滄海原、

引き引きに歪み退き、ひずしぞで

潮干るや、干潟泡立ち、

沸き立つや、さそり 蠍なすもの、

菊石なす、きくめ 鰻なすもの、むなぎ

鰻の怪や、えら 飛ぶ翼の竜、はね たつ

八剣の蜥蜴草食み、やつるぎ

始祖鳥荒き歯に咋ふ。みおやどり

青水泥ひどらが沼、あをみどろ

蟠るぬめり鱗、わだかま うはばみ

憚らず

曠野巨牛、あらぬ おほうし

畏る無し

禍つ狼。まが

をを、をを、をを、

かく経れば、降りつづく雨をもちて、

蛆沸き、れ、蒼蠅なす神神のおとなひ、

万づ四方つ神の災、

高津鳥の災、

昆虫の災、

脂なす、逆吐き、嘔吐り、

生み、殺め、疼き、呻ぶ

もろもろの邪、

曲り、朽ち、饑ゑ、死ぬる物の穢、

常無く、火の気無く、

耀かず、祓ひ了へず、

下心澱み、

清まず、障り、

嚏り、瘡り障り、

※^{あぐ}しく、焦^{いら}だたしく、

苦しく、息づかしく、

瘡^{くさつみ}病、搔^{たは}き淫ると、

醜^{しじ}つ神、追ひ挑むと、

ことごとや世のことごと、

堰^せきたぎち、

泣き、言問ひ、

挙り泣き、泣きなづみて、

ああはや事起りぬ。

第四段

をを、をを、

をを。

神ぞ居^をれ、喚^{おら}び哭^なく、

冥くらき神、

果しなし、泣きいさつと、

海岸うなぎしや上高岸かみたかぎし、

巖窟いはやなす岩戸すなも、沙面、

腹這おほひとふ大海胆とでの

紅べにがら殻がらや、生なましにがら死し殻がら、

錆さびくぎ釘くぎのこここだだくくの釘くぎ

その根もとあら、幹こ疎そにうち埋めて、

開き葉の高張りや、

大葉蘇鉄、

をを、をを、

をを、

滴ながめるや長雨ながめしづき、

水松布みづらなす美豆良みづら霽はらき、

苔ももただむきむすや、股もも、臂ただむき、

細螺しただみと珠みたまい這ひひ、

豊菰はかま禰ま破やぶれ裂ひけ、

小鈴こすず落おち、脚あし結むす紐ひも解とけ、

はららぐと、その短みじ裳かほ、

空そら見みず、たただだ歎なげけば、

海うみ見みず、たただだ歎なげけば、

ししや、伊い邪ざ那な岐かみ大おほ神かみ、

埴はも無なし、建た須け佐す之さ男のを、

汝みまし、

言こと依よさす国くには治しらさず、

何なにももかかもも泣なきいささちる、

父ちちの御み神かみ詔のりたまへば、

伊い邪ざ那な美みよ、僕あが母はは、

妣はは坐ませば、

根ねの堅かた洲すく国くに、

僕は恋し、罷りゆかずば、
ただ哭くと泣く。

ゑや、愚かや、

な住みそ、さば、此の国原、

行け、罷れ、

神柄ぞ、もとな流浪へ、

神やらひやらひたまふと、

ああはれ、建須佐之男、

眼も白み、追ひやらはれ、

泣き涸らし、はた、嗤ひぬ。

大陸序曲

跳躍

跳躍する

跳躍する奔牛は是れ、

敵たる意志力、

陀々羅踏む肉塊の黒旋風、

響き搏つ角、

響き搏つ角、

角は見よ、蒼き兜の大前立。

此処は鄂博——蒙古兒陀羅海、

春ながら冬、

霾らす、霾らす茫漠たる内蒙古、

涯しなき視野、

東へ東へと移動しつつある沙漠の
凜然たる寒気の底に於て。

おお、眼だ、——昼闌けた円日、
ゑんじつ

耀く耀く十方の日あし、

しかもまた金色こんじきの光を奪ふ

濃い青の上空である。

微塵の星、

よく磨かれた気流。

光は光をうつ、

影は影と、

萌え立つ草の芽も何処かにある。

誰知らぬ物の窪にも

何か湛へる。

——何事かある。

跳躍する、

跳躍する奔牛の意志に乗つて、

思ひもかけぬとどろきが来る。

すばらしいいきどほり 憤いきどほりに似た

光るばかりの或物が来る。

あしおと 登あしおと音が来る。

十三時半の風景

根があつた。

カオリヤン 高カオリヤン梁カオリヤンの枯れた畝うねなみ竝うねなみ、

黄色い土、

(満洲鄭家屯郊外)

積み竝べた土糞^{どふん}、
ああ、それだけ。

木があつた、

ひとつひとつに

影を落した枯木であつた。

ああ、それだけ。

平らかな、或は柔かい

うねりのなぞへ、

日向はほどよく温んでゐた。

ああ、それだけ。

マアチャア
幌車^{マアチャア}が遙かを通つた。

白い馬に赤が三頭、

土けむり、

ああ、それだけ。

茫漠とした南満洲、

はてしのない川、結氷、

銃眼のある土塀、

風、風、風、

ああ、それだけ。

苦力^{クリ}よ、

四等車の苦力^{クリ}よ、

小さな日だ、

十三時半——十五時半、

汽車はただ駛^{はし}つてゆく、

駛^{はし}つてゆく。

ああ、それだけ。

路傍にねむる

戦争画報を見て

ひた疲れ、ああ、このごと

路の端はしにねむる人、

命いのちなり、赤き陽ひに

こんこんとうち伏しぬ。

正しきはまじろがず

天地あめつちに面おもてふらず、

戦士いくさびと、守護神まもりがみ、

身をさらし、髭ひげも凍こごる。

なべて見よ、この姿、
昼も夜もここに無し、
祖国のみ、民族の
血と肉と、一つのみ。

まつろはず、信なきまこと

満蒙のかの匪賊。

憤る、憤るもの、

力なり、ためらはず。

戦へば勝つ人も

眠る間無し、小床無し、ぬま ま をとこ

せめて今、銃又むとつづく

ひきかぶるものも無し。

涙せよ、この姿、

昼も夜もここに無し。

ここにあり、土のうへ、

ひたぶるにねむる人。

暁天

日向高千穂峯の御来迎

日向ひうがの高千穂の峯

山の肩かた黝くろきに

風すでに矢羽やば根ね切りて

響きわたり、空へ翔かけぬ。

おお、かみがみ 神々、

神つどひ、はや 早も立たすと、

あかつき 暁、来たり立たすと、

ほこ 戟を手に、かた 東の方

まかげ 目翳しましつ。

蒼雲よ、くにぼら 国原

いまだ覚めず、

野も川もをさなくて

かたな 形成さず。

動けり、ただ、

雲の上の湖の魚

あぎとあけ 顎 朱に燃えて。

日の出なり、
 ああ、朝日子、
 千別くと、雲のかぎり千別くと、
 小さきかなや、淨きかなや、耿と照りぬ。

種子

大陸序曲

種子ありき、神産び玉と凝るもの、
 かく在りき、在りて生き、香は蘊みぬ。
 土なるや、大き陸蒙古の底ひふかく、
 隠らひぬ、鉞と石との隙埋もれ。

時ありき、日も知らず、星も別かず、
ただ在りき、かく在りて千五百万の歳。

驚けよ、この命、靈びに若し、
讚めあげよ、かく古りてかく全けし。

世々ありき、人は興り、地に満ち満ちき。
国興り、将た滅び、また代々ありき。

霧るや、黄なる沙、嵐と哮び、
漲るや、洪き水、天傾ぶけぬ。

なほ在りき、生きの芽の命薫すと、
俟つありき、つひに来るそが黎明。

海を越え、空を蔽ひ、とどろ来るもの、
地響や、音爆はせて翼搏うつもの。

誰ならず、日の御裔みすゑ、久米大伴が後のち、
神々の我が登音あのと、大皇軍おほみいくさ。

俟まつありき、大き陸くが、今かがやけり、
さ緑や、はてしなくよみがへるもの。

種子たねありき、神産かむむすび玉と照るもの、
命なり、息づくと芽ぶきそめぬ。

狙ひ

しづかなり夏空なつぞら、

軍の真上、
まうへ

畏ろしく形無きもの
おそ
風をはらむつかのま。

敵なりや、稚き
をきな

将た生物、
は いきもの

現れ、また現れ、

視野は透る。
とほ

響無し、声も無し、

氣息のみ

輝やかし時秒のみ

満ち、いきるる

ひたおもて、黄の土。
き つち

軍はあり、草をかつぎ
山のごとしづもる戦車、
晴眼せいがんにひたと向ひ、
未だま放たず。

そのはじめ、天地あめつち
創つくられて新あらたに、

俟いつつありき、何ごとかの
一の動き。

どとと射つ我か、彼か、
このたまゆら、
勝つ者の正しき狙ひ
神のみぞ知ろしめすらむ。

熟眠

陰^{かげ}はあり巨^{おほ}き戦車、

据われり休らひのあひだ、

道のべ、

響^{さば}なす蒼蠅^{さばへ}のみ

集^{たか}り集^{たか}る。

ねぶたし、ただ

疲れはてて、

空も無し、仇も無し、

戦^{いくさ}、小^{をや}止み。

命なり、張り満つる

五日^{いつか}、六日^{むいか}、

夜も無し、朝も無し、
飲まず、食はず。

我射ちぬ、彼射ちぬ、

しかも大暑、

何ごとのしらすぞとも

知らず、射ちぬ。

強しとも弱しとも

誰か分^わかむ。

ねぶたし、ただに^{まぶた}瞼の

重く垂^くり来。

もぐりて、深くもぐりて、

兵なり、我ら、ねむる。

戦車よ、鉄の戦車、

しばしを、

ああ、しばしを光蔽へ。

ねぶたし、

ただに眠ると、

何も無し、我も無し、

ひた土に額押しあて。

真昼ぞ、ただ虚しき。

饑ゑたりや、饑うるともいざ、

生きむとも死なむとも

将た思はず。

ねぶたし、ただねぶくて

早や識しらず戦いくさも、弾丸たまも、
ねぶたし、眠らしめて
つかのま母の声聴かしめ。

突撃

突撃、

突撃するもの、

突くなり、突きまくり、

ひた刺し、刺しつらぬき、

銃床さか逆手かもろに

飛び入り、はたきのめし、

はたくや、たたき斃す、

これのみ、ただこれのみ。

突撃、

突撃するもの、

ひたぶる、ひたぶるなり、

生しやうし死無よこしまし、邪無よこしまし、

戦ひ、戦ひ恍惚ほれ、

突き刺し、たたき斃し、

声のみ、息あるのみ、

我あり、跳ぶあるのみ。

突撃、

突撃する時、

ただ見る、命ある、醜みにくき、

顔まなこゆがめ、眼まなこひらき、

恐れに、胆きもへし消え、

わななき、わななくもの。

敵なりや、彼なりや、
将た知らず、

斃れに、ただ斃れぬ。
響きて、ひと斃れぬ。

清明古調

白須賀

遠州浜名郡白須賀

白須賀は昔の宿、

ただ白し、ものさびで、

その蔀しとみ、はひり戸、

なべてみな同じ障子。

ただわびし、軒のきなみ竝なみの

同じ型、

出で、はひる人すらや、

同じ影。

音も無し、なにひとつ、
埃づくものも無し。

草屋のみ、

弱き日のあたりたる。

いづこそ遠江灘、

潮見坂ほどちかくて、

薄ら曇る低き空を

風も来ず。

冬ながら、その屯たむろ

ほのなごむ家がまへ、

ここ過ぎて、きびしとも、

おもほえず、寒しとも。

白須賀は旧街道、

朱の鶏冠とさかふりたてて
軍鶏しやもの居れども。

そは暮のひとあかりのみ。

三宝寺池

閑しづけさよ、三宝寺池、

桜咲き、

桜の枝に

人居りて釣竿垂れぬ。

閑しづけさよ、三宝寺池、

石神井しやくじゐや、

鉾ほこすぎ杉むら、

影は沈む、緑青の水の面おもて。

閑しづけさよ、三宝寺池、

昼た闌たけし日ひざしに

枯れ枯れの葦、

片明る菱、浮うきぐさ萍。

閑しづけさよ、三宝寺池、

潜かづき鳥どり、かいつぶりの

よく響きて、

ともすれば連れ走る、頭のみぞ。

閑しづけさよ、三宝寺池、

雲は行き、

春は雲間に

なにとなくまだなごみぬ。

真夏

真夏^{まなつ}なり、

鉄塔のよき間隔^{かんかく}、

ちちと、ちちと、

飛び撓^{たわ}む

鳥。

子らよ、観^みよ、

噴^ふきあがる雲、

青萱^{あそがや}と田の稻と

照りうつる

空。

真昼^{まひる}なり、

街道のバスの埃^{ほこり}、

スロープのさみどりに

開く窓、

ああ、八月。

唐辛子

花咲きて、

ほのぼのと

人と家、

炎天の野に歪^{ひず}みぬ。

神苑

明治神宮西参道

幽^{かす}けさや、この日なかの
邃^{ふか}き木の木^こしづく。
開^{ひら}けよ、声^{こゑ}を雉^{きぎす}子、
外^との霞^{かすみ}に。

たふとさや、神苑の
光^ひる陽^ひの櫃^か若^わ葉^か、
閑^{しづ}けさや、黝^{くろ}み闌^たくる
こもごもの青と緑。

とどめじ、塵^{ちり}ひとつ、
玉^{たま}の砂^{すな}敷^{しき}きならずして、
清^{すがすが}々^がし、参道^{さんどう}の

うねる徑こみち、こを行かばや。

芝生や、緩るきなだり、

宝物殿、

白きは隠こもる夏の

花のえご、香のひとつもと一本。

よく観にぎよ、和たまみ壺に

吾が幼をこなご子、

亀の子の揺る影を、

鱗ひれ、さざなみ。

しづもれよ、ひるまあらし昼間嵐、

現うつながら、

ほのぼのと雲は立ち、

神と人息吹いぶきかよふ。

西山荘

閑しづかだ、

幽かな谷ふところ、

何か野鳥が来て動かす

枯葉かれはざ雑木ざふき。

よく晴れた

塵ひとつない空、

木こぶかい庭、

まだ寒いその清明。

簡素だ、

飛び飛びの石、

萱の屋に衝き上げ門、

ここは西山荘。

ほの
微かだ、

ひび
罅われた地膚に

影が移る、古木の梅が、

咲くには早いその匂が。

ああ、さうして

音が徹る一つに、

あ、心字池、

大日本史の精神、その響が。

悠悠たる老楽、

いさぎよい魂たましひ、

わたしは聴く、水の音に、
義公を、水戸の黄門。

雪朝

清明さやけさや、この雪、
ふりおける雪につみ、
木々につみ、
燈籠にしろくつみぬ。

神垣かみがきや、このあした、
石走いはほしる水の音の

うちひびき、

氷柱つららみな新なり、日の光に。

この雪に跡つくる、

兔なり、跳び跳びて。

すがしきは笹の芽食む

毛の柔もの、幼し。

満ち満つ忝さ、

何事も畏くて、

息づきぬ、

国の秀の山高きに。

神ながら、この道に

ああ我や言ふすべなし、

大皇子の生れまして

春まさに雲ぞ騰る。

拍手、
拍手ぞ、ただ。

白樺

清^{すが}しきは雪に立つもの、

白樺の林よ、げに

しろき木肌、
こはだ

そは真処女。
まをとめ

幽^{かす}けさよ、雪の溪^{たに}に

直^{すぐ}立ち、ほそき幹の

雪よりも光帯びて。

日は曇り、しろき真昼、
 声も無し、このかがやき、
 風も無し、色ひといろ。

閑しづけさよ、興安嶺、
 ひえびえとけむる梢こしずえ、
 鷹すらも一羽飛ばず。

何すとか、ここに住む

白系露西亜、

貧まづしきは浄きよらかに窓ひらきて。

白夜はくやともほのあかる

空ひととき、

白樺の林よ、げに

光る神々。
かみがみ

竜胆

青淀の岩壁^{がんぺき}をかく穿つもの、
しみいづる滴りの淡水^{まみづ}とは誰か思はむ。

など知らむ、しばしばも吹き通ふ雲、
上ぬめる織^{ほそ}き根のありとある脈^{すぢ}さぐるを。

末そよぐ蔦の葉や、わづかにも紅^{あか}み交ると、
み冬なり、石^{いはし}走る滴^{したた}りの、また雫くと。

目も澄むや、岩角^{いはかど}や、よく開きて、
濃き藍の竜胆ぞ、よく冷^ひえたる。

本栖湖

本栖湖もとすこのへうべうたる、

往き、消ゆる

薄墨の雲に、

しろがねいぶしの燻して。

たださへや幽かすけきに、

懸巢啼きて、

雨は隠こもる木のま、

不二の裏べ。

山の上への畏こさよ、

月円く

現れて、

また白し、隈だちつつ。

来るきたのみ、過すがふのみ、

雲しばしば、

霧きらひつつ、動きつつ、

後清さやけく。

神は坐ますや、この暁、

ああ、波なみしわ皺、

風を思ふ姫鱒は水に棲みて、

また沈みぬ。

煙霞余情

丸彫

丸彫まるぼりに我ほを彫ほる。

この眼やいばの刃ほ。

丸彫まるぼりのこの木彫

細すかくも、素すに荒すくも。

丸彫まるぼりのこのもしさ

我彫ぼりらむ、みづからを皆。

丸彫まるぼりのてづつなさ、

触ふれつつも、この己おのれ。

丸彫まるぼりよ、息つめて、
息かけて、いとほしと。

丸彫まるぼりのうるはしさ、
こを見よと我思ふ。

丸彫まるぼりに刻きぎむもの、
我ならず、何かある。

丸彫まるぼりに彫ほりあげて、
その白き手に献げまし。

微笑

微笑ほほえみはそよ風、

かぎりなく果なきもの、
奥ふかき湖のさざなみ。

微笑は眼に湛へ、

おのづから頬にのぼるもの、
声無くして調ある声。

微笑は明るくして

つつましく玉つつむ絹、
炷きこめぬ、そのまごころ。

微笑のやさしきは

愛し児の上かかる愛。
常秘めて常に満ちぬ。

微笑^{ほほゑみ}を保^{たも}てよ、
 閑^{しづ}かなる世^よの母、
 昼^{ひる}ながら朧^{らう}たき月、
 ありなしの雲^{うみ}さながら。

微笑^{ほほゑみ}はそよ風、
 かぎりなく果^{はて}なきもの、
 ただにあれ、影^{かげ}なき眉^{まゆ}
 輝^{かがや}きは君^{きみ}にあらむ。

日なた

風^{かぜ}に思^{おも}ふ、
 微笑^{そよかぜ}よ、
 かくのごと閑^{しづ}かなる日^ひざしありやと。

菊のはな匂ふ日なた
なにか遊ぶ女童めわらはの
振りかへるに。

おもほえね時の移り、
空むなしとも、迅はやしとも、
ただなごむを。

女童めわらはは遊ぶのみ、
さだめなき秋の日の
それぞとも眼に見えねば。

しばらくは事もなし、
蜻蛉羽あきつばのゆきかひの

時ひかる道しるべ石。

風にそよぐ

陽ひのいろや、

月のごとをりふしを遠く行きぬ。

道の手

ふるさとや、わが母の

この山の手、

昔見しさながらを

ただしづかに。

闌たけたり櫛はじわかば若葉、

池も見えて、

壁赤き山の家いへの
ひとつふたつ。

築石や、棚畑や、

ふかき昼を

日の照り、

時うつる、この片かた咀そ。
ば

影はあり、独た佇たつ

よわらぎ童はな、

おもごし、我かとも、

いま見上げつ。

鷺うそ鳥どりよいづくにか

鳴き、くくみて、

色、匂、さまわかず、
風なるか、空なるかも。

北の関せき、南の関せき、

この道の手、

我は見る、我が昨日きのふの
をさなごころ。

水の上

気色けしきのみ、

風かぜにのみ

言ことづてむ、

この匂を。

水の上^へに

ふる雨の

しばしばも

輪^うに点ちつつ。

旅やどり

すべなしや、

窓に見て

日をおくれば。

ほのぼのと

咲く花の

よき樽^{あふち}、

夏となりぬる。

こさめひたき

色はあり、声にのみ、

こさめひたき、

雫のみこまかなる

この朝あけ。

花はあり、影にのみ、

ひとりしづか、

香かのみ寂びたもつ

杉よ檜。

巢かかは懸る、高くのみ、

ウメノキゴケ、

気け色しきのみ、母おやどり鳥どりや

姿、は羽ぶり。

うつつ現あり、しろくのみ

濡るる光、

卵のみ、おそらくは

四つかいっ五つ。

色はあり、声にのみ、

こさめひたき、

雫よ雫よと、

ただ幽かに。

月に寄せて

ことと言問はむ、

鉄塔の上に坐す円かなる月読の神、
ま まど つきよみ
 二三すぢ細み引く茜の雲。
ふたみ あかね

刈りしほと麦は刈り入ぬ。
れ
 昼貌のほめきも過ぎぬ。

いぎ挙げむ琥珀のグラス、
 時惜む夕ゆふひぐらし。

影のみの紫ながら
 野に色む靄もあるなり。

虚むなしきは

虚むなしきは酒のみかは、

影のみの色もあるなり。

晩冬の詩情

晩冬の月に思ふ遊子は
いさぎよ潔く酒盃を嘯む。

凜烈たる霜、

霜は湖畔の鉄塔を嘯む。

灰くわいぎん銀の煙突を嘯む。

鴨だ、光つて潜かづく

青首鴨あをくびは葦かびを嘯む。

ああ。轆轤こいしと礫は嘯む、

車だ、唐辛子を積む車だ、

犬よ、その真紅しんくのこぼれを嘯め。

春だ、すぐ、

ここへ酒盃を嘯む。

台南旅情

もの憂^うさや、老^{ラオチウ}酒^{チウ}や、
瓜^{クエチ}子はとり食めども、
にほひなし、昼はまだ
彩燈の切子硝子。

空^{あだ}なりや、

雲に行く日のまぼろし、
ゆゑわかず、うつつなし、
女^{めわらへ}童は言問へども。

梅^{つゆ}雨^ゆぐもり

影にのみ、朧たけて、
低くのみ

アアチウ
鳥秋の飛びたわむと。

濡れがちや、

朱の寂びや、

そむねの 碾瓦、

せきかんろう
赤嵌楼。

クエチイ、クエチイ
瓜子、瓜子は眼の下のちひ黒子ほくろ

齒にあてつつ、

齒にあてつつ、

おろか
愚しく美しく時は過ぎぬ。

註。瓜子（西瓜のたね） 鳥秋（台湾島）

赤嵌楼（蘭人の所謂プロヒレンチャ城なり）

蕃童

蕃童は 仔キヨンを射る。

蕃童は弓矢手たばさみ、
蕃刀を玉と取り佩はく。

蕃童は母をうしろに、
敢て立つ、岩根蹴放けはなつ。

蕃童は朱砂すさをよろしと、
風向かざむかふ草をよろしと。

蕃童は 仔キヨンを射る、

竜眼の木ぐれうかがふ。

長唄
元寇

長唄 元寇

第一段

天てんに連る玄界の

際はたて涯はいづく壱岐対馬、

夕浪千鳥群れかへる

蟹あまの小舟をふねのそれならで、

山かと高き兵船へうせんの

満々と張る真帆の数、

櫓やぐらに撓たむる石火矢に

軍鼓しらせいきの調旌旗とどよもし、

舳艫相接つぐ九百余艘、
 入日に染まる船脚ふなあしや
 とどろと洗しほふ潮の手を、
 しや、ひた押しまへの陣がまへ
 松浦まつらさしてぞ押し寄せたる。

第二段

雲の峯

涌くや渚のさきさきに
 駅馬えきばしきりに嘶なげば、
 驚破すはこそ夷敵来襲と
 上じやうげ下げひとしく色を失ひ、
 また風騒やっぐ谷の松、

今に知る法華経の行者日蓮が諷諫ふうかん、

まさしく、他国
 侵逼しんびつなん難とは之なんめり。

第三段

抑々蒙古ときこゆるは

草莽さうまうにして胡沙こさを馳駆し、

万里北に蔓つて

勢漢いきほひ土に臨むや、

金を滅ほろぼし、宋を傾け、

余威高麗に及んでは

しばしば本朝をもうかがふ。

世界吞吐げんの元の野望

敢て挫かん鉄石の、

この人ありや執権時宗、

観ずれば明鏡止水のごとく、

断じては山河ごとごとく震ふとかや。

曳くや竜たつの口、

冴さえは一刀、

死者の素すかうべ頭あたま 勿なねぎまに

大喝してぞ立つたるは、

げにおそろしき国きこつ胆いそ、

由々しくもまた勇ましし。

第四段

星月夜、

鎌倉山のほのぼのに

早や駈け向ふ東国勢を待たばこそ、

今を危急の国難とて、

すなはち^{こそ}挙る鎮西は、

探題太宰ノ少弐、

菊池、大友、

島津、竹崎の将兵を初めとして、

所在の土豪、

庶民、婦女子に至るまで、

^{ひつぢやう}必定は公武^{ぐわん}一丸、

老も若きも、

恥あらば、

死ねや死ねとぞ、

有り合ふ鎧、物の具引きかけ、引き締め、

えいやえい、

えいおう、

おうおうえいや、

えいえいえい、

弓馬きゆうば 刀杖たうちやう とりどりに
 我も我もと馳せ集る。

第五段

日の本は

一天万乗の大君にましまして、

我が御代を

かかる乱れのあさましや、

神ごくわんに御願をかけまくも、

忝いのちくもおん命召させたまはむ、

代らめと

歎かせたまふ畏こさよ。

朝あさぎよめ 潔、

五十鈴いすずの川の御手洗水や、

幣ぬさを手向たむけの男山、
勅使げかう下向と聞くからに
御陵ごりやうの杉の昼闌たけて
日の色添ふる蟬しぐれ、
護摩の煙のしまらくも
籠り絶えせぬ寺々山々、
いづれは異国調てうぶく伏ふくの、
はらはらはらと大般だいはん若にやしんぎやう心経、
物々しくぞ奉る。

第六段

敵は名に負ふ大陸の
銅羅のかけひき、騎きしやう乗の功者。
縦よしや火遁くわとんの術ありとも

我に鍛への太刀劍、

香取鹿嶋の神代より

正せいだい大あつまここに鍾かねれば

やはかゆるがむ此そなへの備そなへ

照覽くわうてんあれや皇くわうてん天皇くわうてん土。

海行かば水漬く屍、

山行かば草むす屍、

また顧みぬ防さきもり人の

昔ながらの雄たけびや。

水城みづぎ、博多は多多良が浜の防塁、

別しては箱崎の宮の大前、

一步も上げじ許すなど、

獅子奮迅に射放ち落せば、

波を潜くぐつて輕舸けいかの面々、

漕ぎ寄せ、漕ぎ寄せ、

につぼんこく
日本国は四国の住人河野ノ通有、
いで物見せん、夷原、
月は弓張る幸先に、
倒す檣渡りに船と
乗りかけ、つけ入り、斬り込んだり。

第七段

頃しも弘安四年、閏七月の朔日、
ああら不思議や、
京にては
晴れに晴れたる夏空に
一朵の黒雲神立ち現れ、
白羽はいだる鏑矢の
見る見る輝き鳴動して、

たちまち西へと飛び去りける。

それかあらぬか志賀の嶋、

海の中道、灘かけて、

俄に起る一夜の颶風^{ぐうふう}。

あやめもわかぬ暗闇^{くらやみ}に

裂けてつんざく稲妻や、

滝なす雨は百雷^{ひゃくらい}の

音と轟く物凄さ。

騰^{あが}るは天^{てん}の竜巻と

逆巻^{さかま}き喚^{わら}ぶ狂瀾怒濤、

頼め頼めの錨も何の

船は木の葉の漂ふごとく、

ちやりやきりり、

きりやきりり、

ちやりやきりり、

きりやきりり、

ちぎるる鎖、命の友綱、

舷々相うち潰えて、

さしもの元賊十万、

あはれや千尋の底の藻屑となり了んぬ。

これぞ神風。

勅をして

祈るしるしの神風に、

寄せくる波ぞ

かつ砕けつる。

寄せくる波ぞ

かつ砕けつる。

制作年表

制作年表

昭和五年

十三時半の風景

昭和六年

路傍にねむる

跳躍

昭和七年

三宝寺池

真夏

建速須佐之男命

丸彫

昭和八年

晩冬詩情

竜胆

本栖湖

月に寄せて

白須賀

神苑

雪暁

昭和九年

雪朝

道の手

水の上

こさめひたき

台南旅情

蕃童

日なた

昭和十年

西山荘

微笑

白樺

昭和十一年

曉天

昭和十二年

狙ひ

突撃

熟眠

昭和十三年

種子

昭和十四年

長唄 元寇

海道東征

卷末記

卷末記

此の詩集『新頌』は些か皇紀二千六百年記念として上梓するものである。

収むるところ、三十一篇、その数は至つて尠い。ただ重要作としての長篇三品があつて幾分の量を加へてゐる。長唄「元寇」は別として、詩は前集『海豹と雲』（昭和四年版）以後の作品の中、その精神と詩風に於て、ほぼ同型のものを選んでここに蒐めた。

一に貫通するところのものは日本精神であり、整律するところのものは万葉以前の古調に庶幾く、概ね四音五音六音の連鎖である。この傾向はもともと、『海豹と雲』の「古代新頌」その他に因を発し、今日に及んでゐる。私の最近の主流を成すものである。私としての蒼古調である。

思ふに、古人の胆を掴むにはその感動律を奪ふに如くはない。蒼古に溯つて之を求めようとした真意はここにある。

かくしてここに収めた諸作品は概ね同種同律のものであつて、之は編纂の主意が単一と整齊に存するからである。

この詩風以外の、短詩短唱、或は小曲風のものとはまた別冊として編輯の上刊行する予定である。近代風の詩作品もまたここには割愛した。でこの蒼古調は私の詩風のすべてを示すものではないのであるから、右は諒承せられたい。

さて、ここに本集収録の作品に就いて、章を別つて、少しく解説して置く。

海道東征

この交声曲詩篇は、皇紀二千六百年奉讃の芸能祭に際し、日本文化中央聯盟の嘱に依り特に作詩したものであつて、信時潔氏之を作曲し、今秋、上演の予定である。なほ、この交声曲は、今度の国家的祝典に際しその公式のものとして選定、東京音楽学校に於て発表、畏くも 皇后陛下の行啓を仰ぐ筈になつてゐる。

作詩に就いては、眼疾最悪の時に当り、ほとほと難渋した。読みも書きもならない状態にあつたのである。で、古事記日本書紀等のそれらの資料は、妻や娘に、習字帖大に筆写してもらつた。無論大方は読ませて聴いた。作も口述が主であつた。機構が少々大きく、歌ふものとしての整齐を節々句々或は字脚、アクセントの上に必要とし、相当に複雑して

るので、眼を瞑つてただ心頭に案配し調律することは容易でなかつた。

さて、この「海道東征」はもともと 神武天皇讚歌として日向御進発より橿原の宮に於ける御即位に至る迄の結構を初念としたが、創作中、白肩ノ津御上陸に筆が及ぶ頃は既に制限された紙数を費して了つた。実演に要する予定の時間をも超過することになり、全体の三分の一に達せずしてうち切るの止むなきに至つた。で、早めながら、天業恢弘の一章を以て、一応の締めくくりをつけた。何れは之を前篇として、中篇後篇を成すべきであり、三部作として完うしたい考であるが、今は之を独立した一篇のものとして置く。

なほ、かうした交声曲詩篇の創作は、自身にとつて最初のものであり、日本に於て、その範例を見ることを得なかつたので、眼が見えぬ上に、全くの暗中摸索であつた。しかし、どうか口述を了つてみると、更に進んでこの形式に向ふ気組もできて来たやうである。

建速須佐之男命

昭和七年盛夏、自分達の季刊誌『新詩論』の創刊に際し、油然たる感興を得て書き下した。この「建速須佐之男命」はこの「枯山の巻」に続いて、「参上りの巻」「宇気比の巻」

「出雲の巻」を纏める筈であつたが、偶々その発表誌を喪つた為め、中絶して了つた。

主として古語古調を用ゐたのは、古事記以来の古語を自己の藁籠中に一応の整理を爲て置きたかつたのである。生かすだけは自分のものとして生かすべきだと思つたのである。のみならず、品詞の古語の使用が頻出する為の調和の上からも考へられたのであつた。自由詩形としたのは、曩に謂ふところの古人の感動律を掴むに最も適切と信ずる表現を欲したからである。なほ思ふところがあつて、この篇には漢語を一語をも使用しなかつた。

内容の本筋は古事記に依拠し、日本書紀とその異本とを参酌した。構成に就いては、自己の解釈を以てし、更に近代の感覚と文化史的想像とを以てした。須佐之男命に就いての私の解釈は私としての見解である。私は彼の命を必しも暴悪神として居らぬ。童心ある勇猛の、極めて男性的な英雄神とし、また偉大なる、最も人間らしい神として考へてゐる。

なほ、私は何れは古事記を近代人の知性と感覚とを以て、改めて解釈しなほさうと考へてゐる。さうして之を詩に移入したくひそかに希つてゐる。で、この一篇は之等の片鱗に過ぎない。

大陸序曲

事大陸に關したものを主として蒐めた。私が滿洲に遊んだのは、その事変前であつたが、何となく風雲の穩かならぬものが感じられた。「跳躍」の中には何か來るべきものの登音が示唆されてゐる。

「種子」の一篇は、交声曲「大陸」の序曲となるべきものである。

今次の事変に於ける作詩は未だ極めて尠い。恰も眼疾に罹り、その機を失つた。他日の集成を期したい。

清明古調

清明心を以て直入しようとした自然景情の幾篇であつた。中には依頼された雑誌の向によつて、多少平易な表現を用ゐた作もある。但し、之等の古調は私のものである。

煙霞余情

余情のみ、ただ幽かな煙霞。

長唄 元寇

この長唄「元寇」は皇紀二千六百年祝典に際し、かの「海道東征」と同じく日本文化中央聯盟の囑により作歌した。長唄としては私の処女作である。作曲は稀音家浄観翁の手に成る。

内容に就いて云へば、元寇といふ一大国難に於ける日本精神の顕現を骨子とした。所謂公武一丸となつて神洲を守護し、外敵にあたる。而も上御一人をはじめ奉り、下は庶民に至るまで正しく挙国一致の体勢のもとに、国体の尊厳と、皇道の大本、然してまた日本武士道の精華とを表現しようとした。世にいふ神風もさることながら、尽すべきことを尽して蒙古勢を撃破し得た執権時宗の胆と、皇軍の忠勇無比とがこの篇の眼目となるのである。この長唄は本年四月二十六日、歌舞伎座に於て公演せられた。各流家元をはじめ長唄界総動員の豪華演奏で、空前の盛事であつた。因みにその夜の出演者は左の通りである。

作曲 稀音家 浄観

作調 福原 百之助

作調 望月 太左吉

第一段 第二段 第三段

杵屋 六左衛門 杵屋 佐吉 笛 梅屋 竹次

長 杵屋 藤吉 三 杵屋 佐次郎 小鼓 福原 百之助

中村 六松次 味 杵屋 佐三郎 小鼓 福原 春之助

唄 杵屋 六真次 線 杵屋 勝吉治 大鼓 梅屋 左十郎

杵屋 勝五郎 杵屋 太十郎 太鼓 梅屋 金太郎

第四段 第五段

吉住 小三郎 稀音家 浄観 笛 望月 長之助

長 吉住 小太郎 三 稀音家 三郎治 笛 住田 又三郎

吉住 小七郎 稀音家 六四郎 小鼓 望月 左吉

第七段

	唄				長	
吉住	吉住	吉住	吉住	吉住	吉住	吉住
小三八	小伝次	小吉郎	小兵衛	小真次	小桃次	小四郎
	線		味		三	
稀音家	稀音家	稀音家	稀音家	稀音家	稀音家	稀音家
和喜次郎	三郎	和三助	六郎	五郎	六四郎	和三郎
太鼓	太鼓	大鼓	小鼓	小鼓	笛	笛
望月	望月	望月	望月	望月	住田	望月
寿蔵	長四郎	吉之助	吉三郎	左吉	又三郎	長之助

第六段

	唄			
吉住	吉住	吉住	吉住	吉住
小五郎	小鉾次	小桃圃	小文郎	
	線		味	
稀音家	稀音家	稀音家	稀音家	稀音家
八郎	四郎太郎	四郎吉	四郎助	
太鼓	太鼓	大鼓	小鼓	
望月	望月	望月	望月	
寿蔵	長四郎	吉之助	吉三郎	

長
松永
吉住
吉住
吉住
吉住
吉住

和風
小太郎
小桃次
小四郎
小三藏
小三郎

長

吉住
吉住
吉住
吉住
吉住
吉住
吉住
吉住
吉住
吉住
吉住

小敞次
小桃園
小文郎
小兵衛
小郁郎
小吉郎
小平次
小伝次
小五郎
小源次
小七郎
小真次

線

稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家

味

稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家

三

稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家

稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家
稀音家

和桃次
六八郎
四郎兵衛

三郎
和三助
六郎

五郎
四郎雄
和喜次郎

四郎太郎
四郎吉
四郎助

八郎
六郎治
六四郎

唄
杵屋
六左衛門

稀音家
浄観

三
杵屋
勝太郎

味
稀音家
和三郎

線
杵屋
佐吉

杵屋
栄蔵

唄

吉住
小鈿次

吉住
小靖次

吉住
小健次

吉住
小都蔵

吉住
小喜蔵

吉住
小雅次

吉住
小寛次

吉住
小紀彦

吉住
小喜雄

吉住
小英次

吉住
小与作

吉住
小三八

稀音家
四郎滋

稀音家
和三次郎

稀音家
四郎作

稀音家
四郎一

稀音家
六吉次

稀音家
六一郎

稀音家
政次郎

笛
望月
長之助

笛
住田
又三郎

小鼓
望月
左吉

小鼓
望月
吉三郎

大鼓
望月
吉之助

太鼓
望月
長四郎

太鼓
望月
寿蔵

制作年表について

制作年表は簡単にした。詳しい創作及び発表目録は、各年の白秋年纂『全貌』に採録してあるゆゑ、参照していただきたい。この期間は短歌の創作に没頭した為に、詩作は極めて少かつた。

以上。

昭和十五年九月

阿佐ヶ谷白秋居にて

著者識

青空文庫情報

底本：「白秋全集 5」岩波書店

1986（昭和61）年9月5日発行

底本の親本：「新頌」八雲書林

1940（昭和15）年10月15日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、大振りにつくっています。

※底本には底本の親本の「表紙」「本扉」の写真、「中扉」の「詩集 皇紀二千六百年記念」、「中扉裏」の「八雲書林刊」が冒頭にありますが省きました。

入力：岡村和彦

校正：川山隆

2011年2月11日作成

2011年12月6日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

新頌

北原白秋

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>